

## 私説比較文化論（1）「ひらかな」とカタカナの使用」

日本には、数多くの形ある文化遺産や、無形の文化的行事がある。それらについて日本史的説明や理解はあっても、世界史的にみてどういう特性や価値があるのか、寺院仏閣などの形あるものでは理解できても、一歩ふみ込んだ文化の内面、つまり中身の理解となると、漠然とした曖昧な理解で通ってきてしまった。幼少期からの教育でも「世界に類のない日本文化の特性」という視点から教育を受けることが殆んどなかった。高校大学時代の教育でも、「日本文化は所詮中国文化の亜流である。漢字を使い、仏教経典を中国より取り入れ、奈良時代に中国の律令制度を国の制度として取り入れた、云々。」と、言った理解でいた。

長じて世界史を学び、海外の文明文化に接して、翻って日本文化の内容と、発展の歴史を考えてみて、これは少し以前の認識とは違うのではないか。日本人がもつと明確に認識し、しいては誇りに思える側面があるのに気がついた。

十年前、サミュエル ハンチントンの「文明の衝突」と題した警醒の文明史が日本でも翻訳出版された。彼はその中で「一部の学者は、日本の文化と中国の文化を、極東文明という見出しでひとくくりに行っている。だが、ほとんどの学者はそうせずに、日本文化文明を固有の文明として認識し、中国文明から派生したが、西暦1000年ないし400年の時期に独自の文明としてあらわれたとみている」、と書いている。

なるほどと思いながら、気がついた点を整理しシリーズで考えてみたい。

私は、この分野での専門家でもなく、知識も少ない。独断と偏見、誤謬も多々あると思う。従って私説としたい。ひとりのビジネスマンの実践的比較文化論としてご理解いただき、誤謬の訂正を、ご教示いただきたい。（平成二二年一月十九日 神奈川銀杏会三火会）

### 一・序

昨年「源氏物語が書かれて一千年」なる展覧会が、横浜のみなどみらいの美術館であった。今年は、「冷泉家 王朝の和歌守展」が、上野の東京美術館であり、改めて流麗な「ひらかな」の書体に魅入らされ且つ圧倒された。よくもまあ、こんな、「かな文字、かな による文章」を作り出し、感情表現、自然描写をやまと言葉で自在に展開し、その上、和紙に筆写を繰り返し散逸消滅しないように、後世の我々に残してくれた。「古の日本人は優れて偉大なことをしたな」「すごい文化遺産を残してくれたな」、というのが率直な実感である。

日本に来て、長期滞在した外国の友人によく聞かれたことがある。「日本人は、どうも三つの違った形の文字を使いこなしているみたいだ。いったいいくつあ

るのだ。それ、全部覚えるのか。英語では、アルファベット26文字でいいのに、たいへんだな。」といった反応が返ってくるのがほとんどだった。

表意文字としての漢字と、表音文字の「ひらかな、カタカナ」の意味と違いを説明してやると、納得するが、「いかにも日本人は、余分な無駄な努力をしている」ように思えるらしい。

「ひらかな と カタカナ」の発生と歴史を調べ、これらが、世界に類まれな日本文化の形成にどんなに役に立っているか。いやこれこそが、日本文化そのものである、と確信できると思う。日本人の四季の変化に対する繊細な描写、感情表現、敬語表現の豊富さなどは、日本人が単一な同質民族だからではなく、「ひらかな、カタカナ」のおかげ、又、それらを使った和歌俳句のおかげといつてもよいと思う。

でも漢字を並べた中国語で同じことが言えないのか。私には、詳細を議論する知識はないが、答えは否定的のようだ。中国語と日本語とは、根本的に言語の構造が違うようだ。

英語でも、同じことを表現しても、意味に微妙な違いがある例は沢山あるが、日本語の語彙の豊富さと、発音やアクセントの大切さを考えると、果たして同列にとらえていいものだろうか。例えば日本語の一人称、二人称、三人称の表現の多様性は、それだけでも使う人の知識教養の違いを示すことになる。

## 二. かな と カナの誕生

山口謡司氏の「日本語の奇跡（新潮新書）」、小松茂美氏の「かな（岩波新書）」は、非常に平易に書かれた啓蒙の書であり、参考にした。特に、山口氏の「日本語の奇跡」第七章「仮名はいかにして生まれたのか」を中心に、他章の要旨と併せて抜粋整理すると、次のようになる。

「ひらかな」「カタカナ」のどちらにも、「仮名」という言葉がついている。鎌倉時代頃までは「仮字」と呼ばれることもあったのだが、「仮名」とは、日本語が誕生してくる思想的な背景を凝縮して示してくれる言葉である。当時「仮名」は別に「借字」という呼称もあったが、これは「漢字を借りる」という意味である。漢字は、奈良時代以来、別名で「真名」と呼ばれていた。「真」とは「中身がいつぱい」という意味であり、「仮」とは「中身のない見せ掛けの」という意味である。

漢字が伝来する以前、日本には書き言葉がなかった。話をすることはできても、それを書き写すことができない。書く技術を持っていたのは中国大陸や朝鮮半島からやって来た帰化人たちである。自分達が話している通りにかけないか。

漢字の音を借りて日本語の音にあてはめ、文章を書くことを工夫した。「万葉がな」と呼ぶのがこれである。上代の「万葉がな」は、日本語の音一つに対して

数種、あるいは十数種の漢字をあてた。じつに九七三にも上る繁雑なものだった。これらおびただしい「万葉がな」は、簡単で分かりやすく、しかも使いやすいものへと自然に淘汰されていき次第に使用される文字の種類も狭められていった。長い年月の歴史が必要であった。明治の半ば過ぎにはじめて統一されるまで今日でいう「変体がな」といわれるような、一つの音に数種の字体が長い間使われてきた。

さらに、漢字の形を略することによって発音記号をつくろうと考えた。例えば「菩薩」と書くのに「草かんむりを二つ書く」。日本語の音をあらわすために漢字の意味ではなく、漢字の一部を利用するやり方である。日本語で「ア」と書くために「阿」の「こざとへん」の部分だけ抽出して「ア」という記号へと変換利用された。「イ」は「伊」から、「ウ」は「宇」から、形としての漢字の「一部」を利用したのである。「カタカナ」の起源である。

これに対して、「ひらかな」とは、漢字の草書体を利用して成立した方法であり、もとは、「草仮名」と呼ばれていた。ちなみに、「ひらかな」という呼称が起ったのは江戸時代になってからである。「安」から「あ」、「以」から「い」、「宇」から「う」が生まれた。

まず、言葉を書く術がないところに漢字が伝来し、やがて漢字の形の一部を利用して「カタカナ」が、全体をデフォルメした草書体を利用して「ひらがな」が、新しい日本語独自の文字となっていたのである。

漢字の意味や発音を捨て去った「見せ掛け」の部分を使うからこそ、わが国独自の文字は「仮名」という名称でよばれることになったのである。

漢字で書かれたものを女性が読むことを忌む慣習があった平安時代、「カタカナ」は男性が漢文を読むための補助記号として発達している。漢字の三分の一程度の大きさで、これを漢字の側に記して読み方などを書き、仏教の経典や漢文を訓読してゆくための補助手段として利用した。

一方、「ひらかな」は、和歌の隆盛と共に発展し、基本的に漢語を利用せず、「大和言葉・和語」を使って作られたものである。これが、日本語の語彙を発達させる大きな原動力となった。漢字から作られたものとは言え、次第に日本語らしい優しさを帯びた自分たちの文字で、物語などを産み出していった。

### 三三 いろは歌 と あいうえお 五十音図の整理

空海の作とも、吉備真備の作とも言われているが、いろは歌「いろはにはほへとちりぬるを わかよたれそ つねならむ ういのおくやま けふこえて あさきゆめみし えひめせず」、十世紀の後半にできたらしい。同じかなを一度ずつ用いてくり返さない、語呂のよい七五調四句、四十七文字の歌に作られている。

これを漢字にあて、濁音を加えてみると、つぎのように読まれる。

色は匂へど 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならむ 有為の奥山 今日超えて  
浅き夢見し 酔ひもせず 仏教の無常観にあふれた表現である。

五十音と言っても、我々が習う「あかさたなはまやらわ」の順で、はじめから並んでいたわけではない。今日と同じ「五十音」の順列は、江戸時代になって確立されたものである。その後、明治、昭和、戦後と何回となく改良整理されてきた。

ただ、子音と母音の組み合わせによって日本語の音韻体系が成り立っていることを「五十音の図」として説明し、今日の五十音図につながる基礎を築いたのは、平安時代中期、加賀の薬王院温泉寺にいた天台宗の僧、明覚（みょうがく）と、いわれている。明覚は「カタカナ」によって、話し言葉を文字として示すことに成功した。

日本語の辞書が、本格的に五十音配列になったのは、一八八九(明治二十二年)、大槻文彦によって「言海」がつけられてからである。それ迄は、いろは順であったが、それ以来「いろは引き」の辞書はない。当時、福沢諭吉が、「こんな不便な字引きはない」と、酷評したというエピソードを読んだことがある。言葉は時代と共に変化、整理され、改革、改良されてきた。

#### 四．かな文字による文芸作品、(物語、日記紀行文、和歌、俳句)

優れた「かな」による文芸作品は、日本の文学史上数多くある。門外漢の著者が駄文を労するつもりはない。現代は和漢混交文であるが、「序文」でも述べたように、「かなによる文芸作品」を文化遺産、古典として尊びたい。

#### 五．後書き

優れた短歌、人の心に残る歌や俳句は数多くあるが、ここでは二つだけ引用したい。

ふるさとの なまりなつかし ていしやばの ひとつみのなかに そをききに  
ゆく (石川啄木)

(十五歳で故郷青森から集団就職で川崎に働きに出てきた友人が、この歌が好きで、若い頃金がなくてすぐ故郷に帰れなかった頃、特に用事がなくても、故郷を思い出すと、何回となく、上野駅で途中下車して雑踏の中に足を運んでは、「誰か弘前弁を話している人はいないかな、と探した。」と聞いた。明治の啄

木の歌であるが、今でも生きている。)。

とんぼつり きょうはどこまで いったやら (加賀の千代)

(夏の夕方、夕飯時までに帰って来ないわが子を、愚痴っている母親を想像していた。しかし、この句が「トンボ取りが大好きだった息子を失った母親の句と聞いて、母親の心情が痛いほど深く悲しく感ぜられる。」よく、死んだ子の年を考えてもしょうがない、なんていうが、この句にはそれを超越した母親の悲しみがある。私自身の理解力想像力の不足を感じた句である。)

戦後の混乱期に一部の学者が、「第二芸術論」なるものを展開し、これら日本古来の芸術を第二流の芸術と酷評した。

和歌や俳句くらい、それを読む人の人生経験、教養の深さ、感情の受容力、想像力の大きさによって理解の違いのものではない。優れた日本の文学形式であると思う。大切にし、誇りに思いたい。「ひらかな」「カタカナ」を使いこなした日本人の文化財産である。

「若し、千年前に「ノーベル文学賞」があれば、「紫式部」は、間違いなく受賞者だ。」と去年の「源氏物語展」を見た友人が冗談を交えて言っていた。イギリスのチョーサーによる「カンタベリー物語」だって十四世紀の作品といわれている。

世が世なら「紫式部」は、「ノーベル文学賞」の受賞者なんだ。それほど「源氏物語」を書いた人物、「ひらかな」の使用、年代、時代背景を、我々は認識して誇りに思っていないか。

「源氏物語」「古典」を理解するには、「古文の文法」を理解する、それには「動詞の活用」に精通する、なんてやっているから、誰もが古典が嫌いで疎くなる。古典を現代文で習って、日本人の基礎教養として、その本質、真髓を効率よく会得することはできないのだろうか。イギリスでも、シエクスピアを原文で読み理解出来る人が、一部の教養人を除いて減っており、易しく訳した現代英語で皆勉強すると聞いた。

参考文献(田中貴子著、「古典がもつとすきになる」岩波ジュニア新書。渡部泰明著、「和歌とは何か」岩波新書。石川九楊著、「書く」中公新書。サミュエルハンチントン著、「文明の衝突」秀英社。「冷泉家王朝の和歌守展」(他)